

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会（第73回）

議事録

期 間 令和8年8月25日（火）から 令和8年9月14日（月）まで（書面開催）

出席者 構成員

北垣 聡一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
宮武 正登	佐賀大学教授	
千田 嘉博	名古屋市立大学高等教育員教授・奈良大学特別教授	
西形 達明	関西大学名誉教授	
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護課

議 題 (1) 天守台及び周辺石垣の保存対策について
(天守台西側内堀御深井丸側石垣及び鵜の首(小天守)水堀側石垣の保存対策)

送付資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会
(第73回) 資料

	1 議事 (1) 天守台及び周辺石垣の保存対策について（天守台西側内堀御深井丸側石垣及び鵜の首（小天守西）水堀側石垣の保存対策）
宮武構成員	布団カゴの被覆・緑化後の外観について、設計上ではコーナーが直角的な絵になっているが、エッジは曲線に仕上げて、コーナーは円錐状にカーブさせたシルエットが良いと思う。 肥前名護屋城でも現地視察してもらって理解できたと思うが、その方が「構造物」的な印象を軽減させて、目に自然に映る。
事務局	ご意見いただきありがとうございます。 エッジ、コーナーを自然な曲線となるよう、検討し施工いたします。
千田構成員	本丸西側の「鵜の首」石垣に関する保存対策について、今回の事務局提案に基本的に賛成する。 各地で地震や集中豪雨による城跡の文化財石垣の被災が増加している。名古屋城においても見学者の主要園路として絶対安全を確保するとともに、災害時および火災時等に緊急車両の動線として「鵜の首」の安全を確保することは最優先課題である。 ただし現天守解体工事、木造再建工事においては、当該「鵜の首」を含めて、本丸西側堀を広く埋め立てることが計画されている。本提案には、本丸堀埋め立て時の「鵜の首」石垣の安定性と本工事の関わりについて言及はないが、その点については、今後、本丸堀埋め立て工事に関わって必要な石垣の保護と見学動線等の確保について、別途審議をすべきである。 蛇籠設置によって、石垣の安定性を高め、動線の確保を行うだけでなく、見学者へ、地震時に「鵜の首」等の石塁状石垣から離れること、石垣の直下から距離をとること等の注意喚起を合わせて行うべきである。地震時の石垣の安定性を完全に予測することはできない。大きく石垣が崩れなくても、天端石が見学者へ落石するだけでも、その結果は重大である。名古屋城では、ハード・ソフトの両面の対策を組み合わせることで、来場者の安全性を高める努力を不断に重ねていくべきである。 そして本丸南側の石垣と堀等、国特別史跡として本質的価値をもつ石垣と堀を覆い隠すようにイベント時の出店を設定することを漫然とくり返すなど、名古屋城総合事務所の国特別史跡の本質的価値への意識の低さは目に余る。国民共有の財産である国特別史跡を管理運営しているという意識を心の中心に据えれば、毎年くり返している本丸南側のイベント時の出店配置の惨事は、そもそも起きるはずがない。 自分たちが、第三者の目で見れば、どれほど恥ずかしいことをしているか、国特別史跡の本質的価値の顕在化という史跡整備の根本に反する行為を漫然と長期間に渡ってくり返していることへの反省と、それをおかしいと思うまっとうな意識が、一人一人の心にあるか、私は強く疑っている。 これを機会に、国特別史跡の管理運営にあたるとは、何を大事にすべきなのかを組織として考え直してほしい。そして、特別史跡としての本質的価値の保護を前提とした顕在化が、いかなる活用においても第一に優先されることを肝に銘じて、自分たちが組織として漫然とくり返してきた行為を見直してほしい。「鵜の首」の石垣を守る以前の問題として、名古屋城総合事務所に勤める名古屋市職員の意識改革が必要である。次年度以降、過ちをくり返さないことを求めている。

事務局	ご意見いただきありがとうございます。 ハード・ソフト両面の対策を組み合わせた安全確保始め、いただいたご意見に留意してまいります。とりわけソフト対策に関しては早急に対応してまいります。
西形構成員	当該箇所の石垣の前押さえ対策については、原案通りで結構かと考える。 なお、覆土の長期的な安定のために（覆土が雨水と共に吸出防止材を通過してしまわないように）、布団籠と覆土の間に敷設する吸出防止材の選定については、覆土に使用する土の粒径を考慮して決定する必要があると考える。
事務局	ご意見いただきありがとうございます。 覆土が長期的に安定化するように考慮してまいります。
梶原構成員	私としては異存ございません。前回よりも良い案かと思います。
北垣座長	鵜の首上の動線を維持し、早期の地震対策として、布団籠による前後の前押えが有効だという。もっとも熊本震災以前に、熊本城跡石垣の主要石垣の構造について独自に調査された桑原丈夫氏（土質力学・基礎構造）によれば、伝統技術の「矩（のり）返し勾配」（金沢・後藤家文書「唯子一人伝」による）を「示力線」上に重ね合わせることで、おおむね合致するところから、伝統技術への高い信頼性と、構造的にも有効性を指摘されている。（桑原丈夫稿「熊本城の石垣勾配」日本工業大学研究報告書第14巻第2号昭和59年） 今回の布団籠による鵜の首の前押え対策は、例えば盛岡城跡での「はばき石垣」は明石城跡などでも採用され、また「水堀石垣」の前面補強には今治城跡、彦根城跡など「水敲き石垣」の事例がある。 また、2（ア）のイメージ図のような、示力線に沿うような石垣基底部を補強する押え盛土は2（イ）の参考写真のように、明石城、洲本城、肥前名護屋城などでも使用されている。このように伝統技術として使われることから、特別史跡名古屋城跡「鵜の首」の前押え対策は、伝統技術を援用することで、現状変更許可申請を進めてください。